



***My our sweet way***

**Original Story** ザウス (純米)

**Novelization** 有沢黎

**Original Illustration** まさはる

プロローグ

5

第1章

11

第2章

53

第3章

89

第4章

123

第5章

177

エピローグ

231



## プロローグ

「お坊ちやま、本日はお茶になさいますか？ それとも、勉強になさいますか？」

「お兄さま、そんなことより、ちいと一緒にお散歩しましょ！」

朝食後、武野慎治は二人の女性に詰め寄られていた。一人は黒髪の美しい女性、もう一人は大きな瞳がかわいらしい少女だ。しかしこのことは、彼女たちが慎治の後を追って、昨晚、この御武町にある武野家の別荘に車で来たとき、予想できたことではあった。

「あのさ、古河さん、いくらお袋に頼まれたからといっても、そんなに一生懸命にならなくてもいいんだよ？ 古河さんだって大学あるだろ。俺は浪人生だからいいけど……」

古河芳生は左手を胸元でぎゅっと握って首を振った。

「そんな、私のことはいいのです」

「古河さん……」

違う、と慎治は心の中で叫んだ。彼は茶道の稽古も、受験勉強もしたくないだけだった。

「芳生！」

慎治と芳生のやりとりを横で見ていた少女——武野千尋が叫んだ。

「は、はいっ」

慎治は苦笑した。相変わらず千尋は芳生が嫌いらしい。だが、芳生に限らず、千尋は慎

治に近寄る女性すべてを嫌悪しているようにも思えた。

「あなたはお兄さまとご一緒する資格なんてないですわ！　なにしろ他人なんですから」

「こら、ちー。その、一応、古河さんは、お袋が決めている俺の……」

「お義母さまが決めた婚約者候補なんて、お兄さまも相手にしなければいいんです」

慎治は芳生の表情をうかがった。案の定、芳生は寂しそうな表情でうつむいている。

「……あのさ、お取り込み中のところ悪いけど、ぼく、学校行つてくるね」

朝食後、一人で黙々と学校へ行く準備をしていた堤<sup>つみ</sup>亜緒<sup>あお</sup>が顔を出した。

「あ、亜緒！　待って！」

慎治は玄関を出ていく亜緒の後をさがるように追いかけた。

「お坊ちゃま！」

「お兄さまあ！」

☆

☆

☆

「うう、寒い」

慎治が身震いすると、亜緒は首をかしげた。

「そうかな」

「亜緒はここに住んでいるから平気なんだよ。俺の実家と比べたら、ここはもう冬だ」

「慎治さん、若いのにおじいさんみたい」

亜緒はくすくすと笑った。無表情だと少年のようなのに笑うとやっぱり女の子だ。

慎治はこの春、受験に失敗し、予備校に通う日々を送っていた。季節は過ぎて十一月。予備校での勉強もスパートがかかる時期に、突然、母親から別荘の管理人を代行するよう命令されたのだ。管理人である老夫婦が、短期だが入院することになったのが原因らしい。当然、断れるはずもない。

慎治の母は茶道の一流派である武野家の家元だ。慎治はこの『武野茶道』の跡継ぎということになる。慎治の母はよく言えば個性的、悪く言えばアクが強い。しかし没落寸前と言われた武野茶道を、ここまで盛り返させたのは、彼女の力によるところが大きい。そのため、慎治の父と祖父が死に彼女が家元となつてからは逆らう人はいなかった。

慎治は眼鏡のフレームに手を当てて、亜緒の後ろ姿を眺めた。制服の上から見ても、その華奢な裸体が想像できた。ほっそりとした肢体は、女性というよりは少年のそれを思わせる。亜緒は管理人夫婦の孫娘で別荘に住み込んでいた。慎治が別荘にやってきたときも、迎え入れたのは亜緒だった。慎治は別荘に誰もいないと思っていたので、亜緒の存在には驚かされた。

「慎治さん」

亜緒が突然、振り返った。

「な、なに？」

「スケベ」

「なっ！」

慎治は赤面した。自分が考えていたことを亜緒に見透かされたような気がしたのだ。

「俺はなにも……」

亜緒の両親は海外出張中だという。彼女は祖父母の入院中、慎治と二人で暮らすつもりだったようだ。女子校生の亜緒と浪人生の自分が一つ屋根の下で暮らすことに、慎治は初め思い悩んだ。だが、亜緒は家事全般をすべてこなしてくれる。今となつては慎治の生活に欠かせない女性だ。その上、慎治の後を追うように、義妹の千尋と婚約者候補で家元の弟子でもある芳生までやってきたのでは、一つ屋根の下など考える暇もない。

「……じゃあ、ぼく学校だから」

気が付けば亜緒が通う学校の目の前まで来ていた。

「亜緒、お前、俺をからかっているだろ？」

「べつに」

亜緒はくすくすと笑いながら校門へ向かつていった。

それにしても俺はなぜここにいる？ 慎治は空を見上げてふと思った。初冬の空は悲しくなるほど晴れ渡っている。母親には別荘の管理人代行をしながら勉強をすればいいと言いくるめられてしまったものの、それで納得できるほど慎治は単純ではなかった。

ここ御武町は慎治の実家から電車を乗り継いで三時間、山間のひっそりした町だ。山奥にはスキー場があり、もう少しすると、観光客がどっと押し寄せる。町の外れには湖があって、慎治の実家、武野家の別荘はそのすぐ側にある。この別荘では毎月一度、武野茶道の茶会が行われるため、古河芳生や武野千尋にとつては馴染み深い別荘だった。

慎治はというと、父が死んだ八年前から一度も来ていなかった。もともと武野茶道を継ぐ気のなかった慎治は、小学校高学年になると、わざわざ御武町まで行くのがおっくうになつていたのだ。親族や茶道関係の人たちに会うのが面倒だったのもある。

それが受験を失敗した今になって、のこのこと足を踏み入れている。このままここで勉強をして来年大学に入ればいいはずなのだが、ここ数カ月慎治はそのことに違和感を感じ続けていた。自分は大学に行つて、それで何をするのだ？ 予備校に通つて半年、慎治は自分が何をやるべきか見失いかけていた。

こんな時、彼女でもいてくれたら少しは気が晴れるのかもしれない。そう思つてから、慎治は櫻子さくらこのことを思い出して激しく首を振つた。あんなのが恋愛だとしたら、しない方がまだ。

慎治は女子校生たちの楽しげな声を背後に、亜緒と歩いてきた道に戻つていった。





# 第1章

別荘の茶室で芳生の点てた茶を飲み終えると、慎治は茶碗の飲み口を指でぬぐい取った。それから懐紙を取り出して指を拭く。

八年ぶりに入った茶室は、浪人生活に疲れた慎治の心を落ち着かせるようだった。慎治は茶道が強い unnecessary までの緊張感が好きではなかったが、茶の湯全体に通じる凛とした雰囲気は嫌いではない。

すべてが終わると、芳生は慎治を見つめて言った。

「これまでに間違いがあったのはお分かりですね？」

慎治はため息をついて「ああ」と言った。

——だから茶道の稽古は嫌なんだ……。

「慎治さん、一つだけお伝えしておきます。茶道は勉強とは違います。作法を間違えないようにすることも大切ですが、そのことばかりにとらわれてはいけません」

芳生はいつもの気弱な雰囲気とはうってかわって、毅然とした態度を取りつづけていた。そして、その態度に負けない実力を芳生は備えていた。武野茶道家元の弟子の中でも、優秀であることは分かっていたが、まさかこれほどまでとは慎治も予想していなかった。

——だから、お袋もこの人を俺の婚約者候補にあてたんだろうな……。

慎治は芳生に叱られて悔しいと思いつつも、反論することができず、無言のまま芳生の着物姿を眺めた。

「な、なんですか……?」

芳生は慎治の視線に気づいて頬を赤らめた。その恥じらいが着物姿によく映える。

芳生の家柄も慎治同様、相当よく、大会社の社長令嬢なのだ。しかも頭脳明晰で、そのうえ美人ときている。天は二物も三物も彼女に与えた。その彼女が、なぜ自分の婚約者候補として、わざわざ大学を休んでまで、この武野家の別荘まで追いかけてきたのか、慎治には分からなかった。

「芳生さん、稽古はとりあえず終わりでいいよね?」

「あ、はい、そうですね……あの、お坊ちゃま? その下の名前は……」

「ああ、ごめん。下の名前で呼ばれるのが嫌だったんだよね。ええと……古河さん」

「……すみません。なんででしょう?」

「でもさ、古河さんもそうやって自分の名前を呼ばれるのが嫌なら、俺の呼び方も変えてもらえないかな。お坊ちゃまって、やっぱり嫌だよ」

「ですが……!」

「慎治でいいよ。それが嫌なら俺も芳生って呼ぶよ。男みたいな名前で嫌いなんでしょ?」

芳生はうつむいてしまった。しばらくして顔を上げて恥ずかしそうに慎治を見つめた。

「分かりました。では……慎治、さま」

さま、か……。慎治は苦笑した。

だが、武野茶道家元の下で修業をしている以上、その息子である慎治の呼び方に気を配つてしまうのは仕方がないことだろう。

「それでさ、なんで、俺なの？」

「はい？」

芳生はきよとした顔で首をかしげた。

「俺の世話なんて、しなくてもいいでしょ。古河さんの家だって、お金持ちなんだし、別にうちに嫁ぐ必要なんてないわけだし……。何もお袋の言いなりになることなんて……」

芳生の蒼味がかった白い顔に再び赤味が差し、彼女は身を乗りだした。

「私は！ その、そういうのが、目的で、お坊……いえ、慎治さまのお世話をしているわけでは、そもそもお世話などとは恐れ多く……」

さきほどまでの毅然とした態度は消え、芳生はうろたえはじめた。この様子では、まともに答えてもらえないだろうと思い、慎治は諦めた。

「分かったよ。でも、本当に俺はまだ結婚する気なんてないからね」

慎治は勢いよく立ち上がった。

「……はい。あ、慎治さま？」

体のバランスを崩す慎治を気づかうように、中腰になる芳生。

「あ、あれ？」

慎治は袴はかまから出ている足をもつれさせはじめた。慣れない正座に痺しびれた両足でいきなり立つことなど不可能だということを、慎治はすっかり忘れていたのだ。

「あ、足が痺れ……!」

茶室の中を慎治はふらついた。

「慎治さま!」

「うわあっ!」

ついに足に限界が来て、慎治はその場にいた芳生を巻き添えに畳に倒れこんでしまった。その拍子に眼鏡が外れ、慎治の顔に芳生の着物の生地しちの柔らかい感触が伝わった。

「あたたた。大丈夫ですか、慎治さま。あ、あつ、慎治、さま……?」

慎治の頭上から、芳生の声が熱い吐息とともに漏れ聞こえた。気がつけば、慎治は着物ぎふくのごしとはいえ、芳生の胸の谷間に顔を埋めていた。柔らかかったのは着物の生地ではなく、芳生のふつくらとした胸の感触だったのだ。

「ご、ごめん……、古河さん、でも、動かないで……」

「でも、その、せめて……」

芳生は上半身を少しよじって、慎治の顔を胸の谷間からずらそうとした。

慎治も芳生の気持ちは分かるのだが、足の痺れが激しく少しも動くことができないうえ、芳生が動いたたびに、痺れは激しくなる。血の流れが止まっていた足へ大量の血液が流れ込

む感覚——。

「芳生！　お願い、動かないで！」

慎治の悲鳴に芳生は全身をびくんと震わせる。

「はっ、はいっ……！」

静かな茶室で、抱き合った二人の鼓動だけがお互いに伝わってくるようだった。

「ご、ごめん。古河さん……」

慎治が謝ろうと芳生の胸の谷間で声を上げると、芳生は身をよじって嬌声を上げた。

「ひゃふっつ！　し、慎治さまあ……」

芳生の鼓動が激しくなるのが、顔に接触した部分から音ではなく振動で分かった。

足の痺れに慣れてくると、慎治は芳生の大きな胸から離れようと身をくねらせた。

しかし、思うように体は動かず、さらに芳生のゆたかな胸の奥深くまで顔を埋めること

になってしまった。芳生の乳房は、慎治を優しく包むクッションを思わせた。

「だ、駄目です……慎治さま……っつ!!」

和服で引き絞られているとはいえ、芳生のふくやかな乳房は隠しようがない。そのあま

りの心地よさに慎治の股間は、足の痺れがおさまるのに反比例して硬くなっていた。

慎治に組み敷かれてしまっている芳生に、それが分からぬはずもない。ちょうど芳生の

引き締まった太腿あたりに、慎治の隆起した上反りが当たっているはずだった。





にもかかわらず、芳生は無言だった。ただ、呼吸だけが、熱く激しくなっていた。静かな茶室で、それだけが音として響いていた。

慎治は芳生の胸の谷間でとろけるような快感を味わっていた。足の痺れはおさまっていたが、できればもうしばらくこうしていたい。慎治は酔いしれたように目をつぶった。

「慎治さま……？」

押し倒されたままの姿勢で、芳生は慎治の頭にそつと手を添えた。

「古河さん……」

慎治は顔を上げて、芳生を見つめた。芳生は額に汗をにじませていた。結い上げた黒髪はほつれて、唇のところに一本かかっている。芳生は、頬を赤らめて潤んだ瞳で微笑んだ。その艶然とした表情に、慎治は自我を放棄しそうになる。

そのとき――。

茶室の外から軽やかな足音が聞こえてきた。

別荘から茶室へと伝わる道である露地ろじを誰かが歩いてくる。

「……っ」

それに慎治が気づいたとき、芳生も冷静さを取り戻していた。二人は目と目で相づちを打つ。慎治は痺れのおさまりつつある足を使って、芳生から離れた。芳生も乱れた着物を簡単に直す。